

館蔵資料紹介 No.26

濃尾大震災 わが国最大級の内陸直下地震に学ぶ

杉 戸 真 太



「結局のところ、東海地震はいつごろ起こるのでしょうか？」

一般の人を対象とした防災講演会の最後によく頂く質問です。地震防災の研究成果をできるだけ分かり易く工夫を凝らして講演にのぞんでも、みなさんがいちばん知りたいことはやはりこれです。東海地震に限らず、想定されている地震がいつ発生するのか、日付単位でわかるようになれば、地震防災の取り組み方は今とは全く違ったものになることが容易に想像できます。地震発生の日があらかじめわかれば、当該地域のすべての人々は広域避難地等でその日の地震が終わるのを待てばよいのです。その場合の被害状況は、“全潰家屋何十万棟、停電何百万棟、高速道路や新幹線等全線不通・復旧見込みなし、、、ただし、死者・重傷者はほぼゼロ！”といったようなことになるのでしょうか。つまり、地震災害とは、個人住宅や社会基盤施設が壊滅的な打撃を受けるが人的被害が皆無に近いというきわめて特異な自然災害である、、、こんな時代がくることは、当分あり得ないでしょうね。

東海地震は、予知の可能性のある唯一の地震といわれていますが、実は、歴史上ではこの震源域での単独の地震が発生した記録はありません。安政の東海地震（1854年）では紀伊半島沖から静岡県直下のところまでの断層が破壊し、その90年後の昭和の東南海地震（1944年）では静岡沖から直下の部分には破壊が至らなかったことから、この領域（つまり現在東海地震と呼ばれている部分）での地震の逼迫性がきわめて高いという解釈になっていることは、よく知られていることです。

発生の可能性の高い東海、東南海のような海溝型巨大地震に対して万全の備えを持つべく努力することは最低限必要です。しかし、我が国で活動度の高い大きな内陸活断層が最も多くある岐阜県の住民としては、個々の断

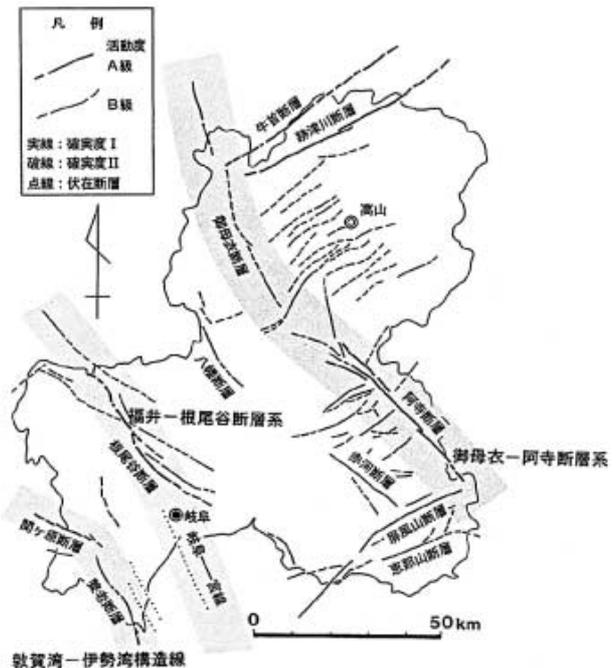


図 1 岐阜県域における活断層分布

層の地震発生確率はたとえ高くなくてもそれぞれの地域にとってもっとも脅威となる地震について、その震源断層の存在、地震被害の全体の状況と自分たちの地域の被災状況を理解すること、そして、個人、家族、地域レベルでできる防災対策を一つでも多く、すこしでも高めることがとても大切です。図 1 は、岐阜県域における主な活断層の分布を示したものです。一つ一つの断層の地震発生確率は決して高くはないですが、大きな断層がこれだけたくさん県内にあれば、内陸活断層地震に遠くない将来に遭遇するかもしれない、と思いませんか。

地震防災の重要性・緊急性を認識するには、なんとと言っても過去の身近な実例を正視することでしょう。幸い（という表現は適切ではありませんが）、岐阜県では明治 24 年 10 月 28 日の早朝に濃尾地震が発生しております。断層の長さは、6,000 人を超える死者をだした

1995年兵庫県南部地震の倍以上もあり、内陸地震としてはマグニチュード8クラスの最大級の地震でした。今後もこれ以上の規模の内陸地震は、まずあり得ないと言われているほどの大地震です。写真1は、岐阜市伊奈波神社の西方の状況で、多くの家屋が倒壊した様子がかがえます。岐阜市内でも非常に強い揺れであったことを示しています。この地震による死者は、約7,600人でした。工学部の能島暢呂助教授の試算によると、当時震度7の地域にいた人は約50万人程度ですが、仮にこの地震が現在発生した場合200万人以上になるものと予測されています。内陸活断層の再現期間（繰り返し発生の間隔）は数千年オーダーなので、濃尾地震の原因となった根尾谷断層については、当分というより一生気にする必要はありません。しかし、近くには養老断層や関ヶ原断層などがあるため、岐阜大学にとっても決して安心はできません。



写真 1 岐阜市伊奈波神社近辺
(濃尾震災地写真、此企所蔵より)

110年以上も前の出来事ではありますが、この濃尾地震の震災の状況については、様々な資料、文献が残されています。本学附属図書館には、震災直後の貴重な写真集や当時の新聞記事を収集・整理して震災基礎資料としてまとめたものがあります。また、市町村別戸口被害一覧表というものがあり、たとえば上加納、長良、早田、萱場、というような当時の町村単位での死者（建物倒壊と焼死の区別）や重軽傷者、建物被害個数（全潰、半潰、全焼、半焼の区別）の調査結果がまとめられています。これらを丁寧に調べることにより当時の詳細な被害状況がわかり、そこから得られる地盤条件による地域の震度の違いなどは、将来の地震によるこの地域の相

対的な被災状況の差異を高い精度で教えてくれるものとなります。

また、この地震の二、三日前に小地震があったものの、前兆現象と予感させるものはなく、新聞記事には、「此震災に逢ふ今日に至りて始めて其の前兆ありしを追想するのみ」とあります。後になってから「あれは、前兆現象だった」というものがたくさん出てくるのは、ここ数年の被害地震でも同様で、つくづく地震予知の難しさを物語っているように感じます。

岐阜市若宮町には、この地震で亡くなられた全県下四千数百人の震災死者台帳が保存されている震災記念堂が建っております。この記念堂は、当時の衆議院議員天野若円が中心となって、愛国協会の記念事業として建てたものです。平成2年には100回忌が催され、現在でも毎月28日は法要が営まれております。

各地域に存在する過去の悲惨な被害事例を真摯に受け止め、ある日突然来襲して取り返しのつかない甚大な被害をもたらす地震災害の軽減化について、常日頃から考え、実行するよう心がけたいものです。

なお、東海地震や東南海地震による東海地域の震度や液状化危険度の予測値を各県のご協力を得て岐阜大で算出しておりますが、これらの結果を郵便番号エリア単位で表示したものが下記 URL で見れます。近い将来には、県内の内陸活断層による予測結果も参照できますので、一度ご覧下さい。

<http://www.cive.gifu-u.ac.jp/lab/ed2/kensaku/>

【関係所蔵図書】

1. 岐阜県郷土資料研究協議会、明治24年岐阜県震災誌付録一、市町村別戸口被害一覧表、昭和53年
2. 岐阜新聞・岐阜放送、写真でみる濃尾震災 実態とその復興、1991年
3. 村松郁栄監修、市原信治著、写真集濃尾地震と根尾谷断層、昭和53年
4. 中京圏地震動観測連絡会、新聞記事にみる1891年濃尾地震被害の基礎資料調査 新愛知および岐阜日日新聞の記事整理、1994年

(すぎと まさた：流域圏科学研究センター長、教授)